



中部の

# エネルギーを 築いた

# 人々

## 松阪の電気王といわれた 安保 庸三

松阪の電気王といわれた安保庸三(1865~1942)は、慶応元年2月、松阪の四方梅次郎の長男として生まれた。幼少時に惟精舎で漢学を学び、16歳のとき上京、明治法律学校に入学して弁護士を目指したが、明治18年松阪の安保ひさの養子になって、家督を相続し、貸席業金波楼を経営した。明治26年3月、松阪町の大火により楼閣が焼失したが、火災保険をかけていたため、同業者に先駆けて復興を果たし事業を軌道に乗せた。明治30年11月に安保も参加して松阪水力電気が発起されたのも、大火の影響で安全な明かりが求められていたことが一因であろう。不況で資金

調達が難航したが、大阪の才賀藤吉の協力で、設立にこぎ着けた。

才賀藤吉(1870~1915)は、三吉電気工場を経て明治29年に独立し、才賀電機商会を起こした。電気機器の販売や電気工事の請負を行なったが、それに止まらず電気事業や鉄道事業の経営に事業活動を拡大し、和歌山水力電気、王子電気軌道、岡崎電気軌道など全国に60社を超える事業を傘下に擁する才賀電気王国を築いた。しかし日露戦後の不況で資金調達に行き詰まり倒産、大正4年不遇のうちに逝去している。



安保庸三  
(三重県編纂協会  
『燦たり矣三重の光』)



才賀藤吉  
(『電気之友』193号)

## 1 多彩な事業活動・政治活動

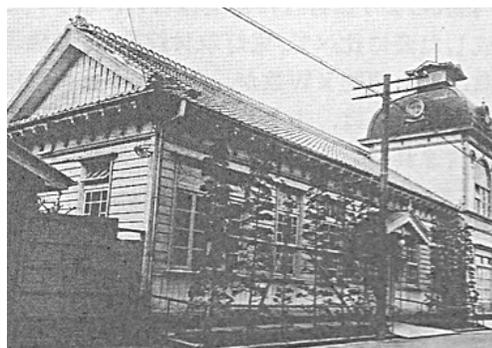
安保は家業を閉じて、才賀と二人三脚で松阪水力電気の経営に取り組み、大正4年に才賀が逝去した後は、地元松阪の事業を受け継いで発展させた。安保は松阪水力電気のほか、三重共同電力取締役、尾鷲電気取締役、三重合同電気副社長、合同電気取締役など電気事業を舞台に活躍するとともに、交通事業でも才賀藤吉とのコンビで進めた松阪軽便鉄道の社長、松阪自動車・勢和自動車の社長を勤めた。さらに、合同瓦斯社長、松阪銀行監査役、



松阪水力電気本社 筆者撮影

三重県農工銀行監査役、松阪商工会会長など、松阪地域を中心に多彩な事業活動を展開した。また、政界にも進出し、松阪町会議員を勤め、昭和8年2月の市制施行後、初代の松阪市会議長に就任している。その他三重県議員(大正9年から12年まで県会議長を務める)、飯南郡郡会議員、大正13年5月には、衆議院議員にも当選している。安保は人に接して温容、座談の妙に優れ、人望も厚かった。昭和17年、78才で逝去している。

以下、才賀とコンビで進めた松阪水力電気、

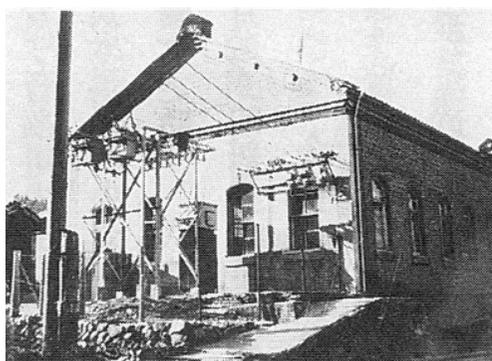


合同電気本社 昭和12年頃(『東邦電力史』)

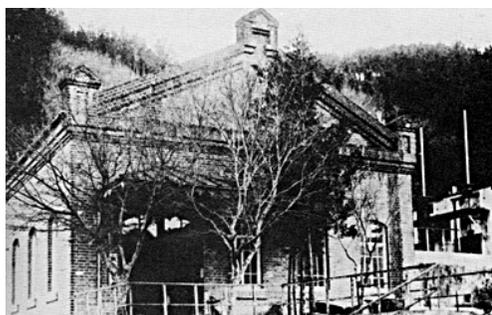
松阪軽便鉄道について紹介する。

## 2 松阪水力電気・三重合同電気

松阪水力電気は、明治30年11月、安保庸三、後藤友之助、徳力嘉蔵ら松阪の実業家9人によって発起された。地元の水利組合や木材組合との交渉を重ね、櫛田川の上流に水利権を得て鋤形発電所(270kW、昭和36年廃止)を

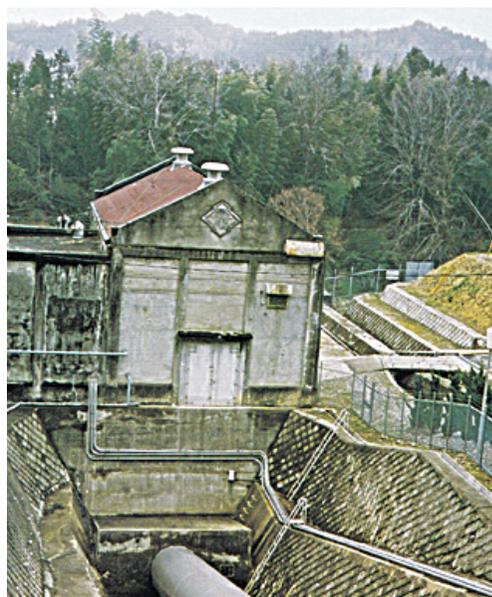


鋤形発電所(『三重の水力発電』)



鋤形発電所(『三重の電気史 中南勢編』)

建設し、松阪の町に電灯電力の供給を目指した。最大の難問は資金集めであったが、前記のように才賀藤吉の協力を得て、明治36年12月創立された。資本金13.5万円、初代社長に後藤友之助、明治40年から才賀藤吉が就任、安保庸三は当初から専務取締役であった。発電所等の工事は才賀電機商会在が請負い、明治39年10月に完成、翌11月に開業し



下出江発電所(『三重の電気史 中南勢編』)

た。当初の需要は電灯700灯であったが、40年7月には3300灯へと増大、さらに第1次大戦期には爆発的に需要が増加し、供給力の確保に追われた。大正9年には多気郡相可地区に相可火力(500kW)を建設し、11年3月には櫛田川に下出江発電所(825kW)を建設して需要増に応えた。安保は、大正8年8月、社長に就任し、順調に業績を伸ばし、大正10年7月には松阪市内白粉町に鉄筋コンク

リート造の本社を建設(現在は松阪市医師会館)した。大正11年5月には、三重県下の電力界統一に協力し、津電灯、伊勢電気鉄道とともに三重合同電気(昭和5年1月合同電気に改称)を設立した。安保は、同社の設立時から副社長を務め、初代社長川北久太夫、2代目社長太田光熙を支えたが、実質的には安保が経営の実権を握っていた。昭和5年1月合同電気に改組改称された後は取締役を務めた。

### 3 松阪軽便鉄道社長

才賀と組んで実施した事業に松阪軽便鉄道がある。同社は、松阪駅を起点に、櫛田川沿いの旅客、阪南郡の木材搬出等を意図した大石線(13哩)と、大石港(現松阪港)の開発を意識した大石線(2哩)からなる路線を計画し、明治40年6月に敷設の特許を得た。才賀藤吉、安保庸三が参加することで事業化が進み、明治43年10月に設立された。資本金35万円で、松阪水力電気同様に、社長に才賀藤吉、専務取締役安保庸三が就任した。敷設工事はやはり才賀電機商會が請負い、大正元年8月に大石線が開通、従来櫛田川の水運に頼っていた木材はじめ薪炭、製茶、繭糸等を輸送し地域産業の発展に貢献した。翌2年には大石線が開通した。安保は大正2年12月、才賀に代わって社長となり、大正8



松阪軽便鉄道之葉

(三重県史編さん班「統新視点 三重県の歴史」)

年には松阪鉄道へと改称、昭和2年には電化を進め、松阪電気鉄道へ改称した。市民から松電と呼ばれて親しまれたが、昭和19年、三重交通に統合され、昭和39年廃止となっている。

(浅野 伸一)



松阪軽便鉄道松阪駅

(『松阪・多気・飯南の100年』郷土出版社)